

『般若經』は引用されるが『般若讚』はなく、かわって『明慧』所引のものに相当する『宝徳藏般若經』の一節が引用され、『月光』がツォンカバの所引に影響を与えたものと推定される。また、ここで引用される『般若經』は、『細疏』所引のものの要約であるが、相当するのは『細疏』IX41の所引の前半部分だけであり、『学説』を説く「 ρ 」の立場から言えば、経証としてより重要である「声聞・独覚も般若波羅蜜に依拠する」という部分は見出されない。プトン自身はシャーントンティデヴァを「 ρ 」であると断定していないこと、『入菩提行』が【学説】を否定するとの理解があったことを『仏子渡岸』が指摘することとも、関連が想定される。

『細疏』以外のインド撰述『入菩提行』注釈書の中、『入菩薩行細疏』(Der. No. 3875b)は、『般若讚』17偈を引用しているが、『殊勝解明』(Der. No. 3880)では、『無分別讚』と称される上、『般若讚』17偈C、D句のみの引用であり、声聞・独覚については、『細疏』所引の『般若經』の要約を引用するもの、「声聞・独覚も般若波羅蜜に依拠する」と説く後半部分に相当するものは見出されない。偈の注釈内容から見ても、『殊勝解明』における了解では『入菩提行』IX41が、空性を見ることの特勝性を述べるものではあっても、『明慧』、『仏子渡岸』における【学説】を裏付けるものとはならない。

以上のように、BCAIX41の註釈にあたって引用される『般若經』『般若讚』17偈、『宝徳藏般若經』が、Lam rin chen mo等、ツォンカバの他の著作にも、【学説】に関連した文脈の中で、その教証として引用されている。これらが経証として『細疏』IX41の引用に端を発し、それ以降、インド、チベットにおいて

重要視されていたと考えられる。また、後代のゲルク派においては、人法二無我を解説するにあたって、『入菩提行』IX41自体が【学説】の重要な理証としての役割を担っていたことが窺われる。このように到った背景には『仏子渡岸』の所説が果たす役割が大きいが、その所説の形成には、『細疏』IX41、ことにそこに引用される経証の「声聞・独覚も般若波羅蜜に依拠する」と言う内容が根拠となっている。しかし、その経証の意味が【学説】を示すと明言されるようになるのは、『明慧』、『仏子渡岸』に至ってからである。

中国に於ける大乘思想受容の一樣相

——法華經を中心に——

采翠 晃

それ以前は漠然とした概念しか持っていなかった中国人に、最初に明確な大乘思想を伝えたのは鳩摩羅什であった。中国人が受けたその衝撃たるや、はかり知れないものがあるが、その具体相はどのようなものであったのだろうか。法華經に対する態度を中心にみていくことにしたい。法華經は、声聞作仏を説くという点において、他の大乘經典とは明確に区別されるべき性格を持つており、中国人もまたこの点に注目したからである。従って、仏教全体を見渡そうとする時、法華經をどのように位置づけるかが問題とならざるをえない。

大乘大義章を見ると、鳩摩羅什は、自らが翻訳した法華經に対して、奇妙な屈折した態度を取っているように感ぜられる。勿論、

鳩摩羅什が法華經に大きな影響を受けていたことは疑いが無い。それは、慧遠が問いを発する際に全く法華經に触れていないにもかかわらず、しばしば法華經を取り上げていることにも窺える。また鳩摩羅什が依拠したと伝えられる大智度論においても法華經は「秘密法」という独特の地位を与えられている。その一方で、大智度論においては、般若經とそれ以外の大乗經典、といった大きな枠組みは一貫しているようである。即ち、法華經は「それ以外の大乗經典」の中では別格であるとしても、基本的には、般若經に包摂されるものとして捉えられているということになる。

そのような基本姿勢の中で、鳩摩羅什は法華經を般若經の立場から見ようとしているようである。

鳩摩羅什が目立って法華經に關説するのは、羅漢受決についての問に対する答である。慧遠の問いに対して、鳩摩羅什は、まず、阿羅漢が仏となるために再び生を受けることを説くという点で法華經の独自性を認める一方、法華經以外の大乗經ではそのように説かないと述べ矛盾する説があることを認める。法華經のみにこだわるのであれば他の諸經を信じないことになってしまうとしている。その上で、鳩摩羅什は慧遠にそのように説かれる因縁を考へるべきであると説く。これは、鳩摩羅什が法華經の説を世諦に属するものと考えていることを示している。様々な因縁に従って説かれるのは、第一義諦ではなく世諦である。

また大智度論は、般若經不退品の議論を仏が須菩提のために順々に法華經の義を明かしたものであるとする。しかるに、その「法華經義」とは「畢竟空」であるという。さて、いま法華經を繙いてみても、法華經が「畢竟空」を主要な課題とした經典であるとは読みづらい。「畢竟空」を主要な課題とした經典といえは、

やはり般若經であろう。即ち、この箇所を参照する鳩摩羅什は法華經を般若經の立場から解釈しようとしていると言えよう。また別の箇所に見える「なお一乗すら定相無し、何に況や三乗をや」という論法は、般若經のものと見るべきであり、ここでも法華經の教説を般若經によって再解釈する試みが見られるのである。法華經は、阿羅漢の作仏を説くという点で、確かに他の大乗經典とは異なる性格を持っているものであり、般若波羅蜜の立場に立てば、一乗すらも空ぜられるものであり、一乗三乗を云々することは法華經の特徴として捉えられていない。

鳩摩羅什が言っていることはそれぞれ、一々もつものように思われる。しかし、この態度からは、「清淨衆ではない現在の我々としては法華經を一旦留保して仏道を歩むべきである」といった態度が読み取れるのである。鳩摩羅什が法華經の教説を世諦において捉えていたとすれば、なおのこと、然るべき因縁があるまで妄りにその説をとるべきではないと考えたのではないか。殊、慧遠のように、「羅漢究竟、与菩薩同」と、法華經の教説を「同」という点に焦点を置いて理解しているのならばなおのことである。般若經・大智度論は勿論のこと法華經方便品の五仏章にも見られるように、仏教の教説は三乗に分別して説かれるのが基本である。それにもかかわらず、慧遠のように初めから「同」ということに力点を置いて理解したのは、仏によるその分別を否定的に解してしまふ可能性が大きいからである。

鳩摩羅什はほぼすべての答において二諦的な解釈を提供するのであるが、慧遠が方便説に対して、鳩摩羅什が期待したであろう程の理解を得たようには見受けられない。鳩摩羅什に対して、慧遠は、もとより三乗に「優劣不同」などある筈がないという前提

の下で問いを発している。このような見解が大乗大義章中で鳩摩羅什が主張する大乘觀に反するものであることを、慧遠は重々承知であったろう。してみると、慧遠は、鳩摩羅什が主張する大乘と小乗との峻別には、むしろ反感を持っていたのではないかとさえ考えられるのである。大乘大義章中、慧遠が直接にその名を出して法華經に關説するのは、卷中「問法身仏本習并答」の、「若如法華經說。羅漢究竟。与菩薩同」という一ヶ所だけである。しかし、廬山に縁があった人物の多くが正法華經の研究に取り組んでいたことを考え併せれば、慧遠もまた法華經に深い興味を抱いていたと考えなくてはならない。また、法華經の名をわざわざ出すのがこの部分だけということとは、「羅漢は究竟にては菩薩と同じ」という教説において法華經を捉えていたということになろう。鳩摩羅什にとって法華經は、「清淨衆」に対して説かれたという意味において大変な權威を持つ經典であった。しかし、彼の教学の中心はあくまで般若經にあったのである。鳩摩羅什にとっては、「清淨衆」に対して説かれたという法華經の教説は、あくまでも「清淨衆」のためのものであって、自らのためのものではなかった。少なくとも、鳩摩羅什が中国人に伝えようとしたのは、こういった内容であったと考えられる。また、鳩摩羅什の思想の中心には大智度論が据えられていた。従って、法華經が「羅漢は究竟にては菩薩と同じ」と言ったとしても、それは世諦における差別を統合したまでであり、第一義諦においては、既に般若經及び大智度論において解決済みの問題であったのである。この点は、鳩摩羅什と慧遠の間の最も深い溝であったと言ってもいいであろう。

仏教内に様々な教えがあるということについて、慧遠と鳩摩羅

什の態度は対照的である。慧遠は、それらの区別は教えの受け手である人や時代に依るものだと考えた。この考えの下では、どのような教えによって修行するかは、修行者の研究や努力に任ぜられることになる。対して、鳩摩羅什は、教説が様々な異なるのは仏の方便力に依るものであるとするのである。

法華經は、教説に様々な違い（三乗の別）があるのはその教説の受け手である修行者に様々な能力の違いがあるからであるからであると説く。般若經・大智度論も同様であり、また、鳩摩羅什も、基本的にそのラインに沿って、菩薩（大乘）と声聞（小乗・阿毘曇）との違いを優劣という価値判断の軸上に置いて、くどいほどにも繰返すのである。

志向性・他者とその言語

—フツサル現象学における倫理的なものへの通路—

紀平 知樹

現象学はその運動の中で次第に探求の主題を現象から現象せざるものへと移行させてきた。例えばフツサルは彼の思索の中期から後期にかけ、地平志向性をその分析の主題にしている。ハイデガーもまた「顕現せざるものの現象学」といい、メルローポントイは「見えるものと見えないもの」を問題とし、さらにレヴィナスは「存在の彼方」を問題とした。もちろんそれぞれの哲学者において現象せざるものが同一の次元で問題にされているわけではないが、しかし彼らが現象の背後に潜む現象せざるものに目を向けていることは明らかではないだろうか。そこでここではフツ